

HITA PRIDE PROJECT

日田 #01

日田は「ヒト」でできている。
[HITA/HITO] HITA PRIDE PROJECT

日田を愛し、
日田に生きるヒトたちの
ストーリー。



日田
PRIDE
PROJECT

#01

日田を愛し、
日田に生きるひとたちの
ストーリー。



HITA PRIDE PROJECT

高いビルはないけれど、豊かな緑がある。
夜の明かりは少なくても、夜空に数多の星がある。
人は多くないけれど、
さりげなく声を交わせる人がいる。

何気ない日常の中で、熱をもって、
日田に生きる人たちがいる。
今日も日田には、豊かさを纏ったストーリーが、
風のように流れている。

そして日田は、日田を愛する人たちで
つながっている。



井手 莊和可

<40>

仲間を日田に
連れて帰ってきて



SOWAKA IDE

1976年生まれ。
福岡市育ち。福岡県内の大学を卒業後、
同県内の企業に就職したが、会社を辞め
職業訓練校へ。2005年に日田市前津江
町に移住した。屋根の葺き替えを請け負う
「奥日田美建」の社員。



古民家や文化財などの伝
統的な日本の屋根を葺き替
える茅葺き職人。九州を中心
に古民家や文化財の屋根の
改修や補修をしている。5年
前には三重県の伊勢神宮の
遷宮にも関わった実力派。早
朝に家を出て帰宅は夜中に
なる生活。屋根の上での作業
は冬寒く、夏暑い。苦労は多
いが「どんな現場でも依頼者
に喜ばれる仕事だから、やり
がいがある」

福岡市で生まれ育った。小
学生のころ、夏休みには祖父
の家がある福岡県の旧杷木
町（現朝倉市）でよく遊んだ。
土間がある茅葺き屋根の家
で寝起きし、川で魚を捕り、
山でクワガタやカブトムシを
探した。「漠然と『田舎ってい
いな』と思っていた」
そんな漠然とした思いを形
にしようと動いたのが、28歳の
時だった。脱サラして「大工の
仕事を学びたい」と職業訓練

校に入った。間もなく、茅葺き
職人の仕事を知る。ちょうど
福岡県久山町で古民家の屋
根を扱っているところを目に
した。古い屋根に興味はあっ
たが、実際に作業を見るのは
初めて。屋根の上で黙々と仕
事をする職人たちの姿に「理
由はうまく言えないけど、と
にかく、おもしろそうだと思っ
た」。2回、3回と足を運ん
だ。現場を仕切っていたのが
日田市内に住む茅葺き職人
三苦義久さんだった。今の師匠
だ。見学するうち手伝うようにな
り、弟子入りを申し込んだ。
その条件が「作業場のある」前
津江に住むことだった。

訓練校を卒業し、29歳で妻
と娘と3人、引っ越してきた。
しかし最初は仕事で怒られる
日々だった。「何度も辞めよう
と思ったけど家族がいたから
踏ん張れた。いいかげんなこ
とは、できんもんね」。今では、
後輩を指導する立場になっ
た。「教えたことを後輩ができ
るようになることは楽しい」
前津江で暮らすようになって、
川での魚釣りが趣味になっ
た。疲れて帰った夜は、満
天の星に癒やされる。春には
ワラビやゼンマイなど山菜を
味わい、秋には栗や山芋も採
れる。たびたび、近所からのお
裾分けもある。そんな何げな
い日常に「良さ」があふれてい
て、「都会で経験できないこ
とが、ここにはたくさんある」
と感じる。

MASAHIKO SENZAKI

1976年生まれ、北九州市出身。福岡県内の大学でデザインを学び日田市内の家具メーカーに就職。その後、独立して豆田町で日田杉を使ったオリジナル雑貨などを販売する工芸雑貨店「エリアス」を経営する。

日田の魅力に 気づいて



仙崎 雅彦 〈40〉

工芸雑貨店経営 日田市豆田町

一番言いたいのは、「日田の人は自分たちの住む地域の魅力に気づいていない」ということ。よそ者から見れば、日田には魅力がたくさんある。20年近く前に日田のソファメーカーに就職したとき、会社の近所のおばちゃんや昔からの知り合いみたいにあいさつしてくれた。会社の同僚も人情味のある人ばかりで「居心地が良い場所だな」と思いました。街中を走る暴走族もきちんと信号を守るしね。日田は家具を含めた「ものづくりのまち」。その魅力を発信しようと、2009年にエリアスをオープンしました。全国でも世界でも通用するような「本物のものづくり」から生まれる商品を出していきたい。それだけのものが日田にはあると思うから。若い人たちと一緒に盛り上げられたらいいな。

SO SAKAMOTO

1990年、小鹿田焼窯元の長男として生まれる。佐賀県の有田工業高卒業後、鳥取県の陶芸家に弟子入り。約2年間の修業を経て、20歳で日田に戻り小鹿田焼の陶工となる。生み出す器は「前衛的だ」と称され、全国にファンが多い。

社会は思っているより 楽しいよ



坂本 創 〈27〉

小鹿田焼陶工 日田市源栄町

鳥取の師匠に「いろいろな経験をしなさい。それが器に表れる」と教えられました。それで冬山に登ったり、イノシシを捕ったり。陶工になって7年、その言葉の意味が分かってきた気がします。個展を開いたり指名で注文が来たりして、自分の器が必要とされているのを実感できるのは幸せだし、生きる価値を感じます。日田でしか仕事はできないけど、器を介して、いろいろな人と知り合うことができる面白さがある。小鹿田焼は器に作者の刻印がないが、自分のものと分かってもらえるようなものを作り続けたいですね。中高生の皆さんには、自己プロデュースをして、市外の人を巻き込むような仕事をしてほしい。社会は思っているより楽しいよ。

KOICHIRO SETO

1960年生まれ。日田高卒。東京の大学で学び、福岡県の商社で木材関係部署の営業職を6年間続け、1989年に日田へ帰郷。家業の木材加工会社2社へ入社。現在、石油販売会社代表や日田木材協同組合の理事長も務める。

木材資源活用して 次世代へ



瀬戸 亨一郎 〈56〉

木材加工業 日田市淡窓

日田に帰って家業を継いだのは「日田には人がおらず、優秀な人もほとんど出て行ってしまうのではないのでは」と考えたから。幼い頃から木材を見ていて愛着もあったのかもしれない。人口減で家も建たず、木材産業は確かに厳しい。でも関心を持って応援してもらえる業種で、特色あるやり方を考えれば生き残れます。日田には先代、先々代の人がすごい量の木材資源を植えてくれていて、とても恵まれています。うまく活用して次の世代に残せる人が必要で、これは日田の人にはできない。中高生には、人とのつながりがある日田へ戻ることを、多くの選択肢のうち一つには入れておいてほしい。外に行ってもいい。ちゃんと厳しい経験を積んで帰って来いよ、と伝えたいですね。

SHINICHIRO MORI

1978年生まれ。日田市中本町出身。日田林工高卒。大阪の芸術系短大を経て木彫りで名高い井波彫刻（富山県）の彫刻家に弟子入り。輪島塗も学んで25歳で帰郷し、社寺の建築装飾から表札、看板などを手掛ける家業の「力峰彫刻所」（高瀬）で彫刻師として父親を支える。

まねすることの 大切さを忘れない



森 真一郎 〈39〉

彫刻師 日田市高瀬

仕事の喜びは、商品ができたときの達成感と、届けた商品でお客さまに幸せを感じていただけたとき。神社仏閣の装飾を手掛ける職人は減りましたが、伝統の意匠や技法は大切に伝えていかなければと思っています。若い人には、まねすることの大切さを忘れないでほしいです。まねすることは、相手に興味を持ち、いいところを吸収しようという姿勢。そうすると仕事の技術も上がるとともに、人の気持ちも理解したり気遣いも生まれたりします。できるだけ日田で働いてもらうために、高校生が地元企業で長期アルバイトできる制度をつくってみるのも一つの手かなと思います。生きた環境で仕事し、給料をもらうことがふるさとへの愛にもつながるのではないのでしょうか。

HITA
PRIDE
PROJECT



日田には、
陶器という
山の幸がある。

SHINJI TAKAMURA

1976年生まれ。日田林工高卒。山口県内の大学でデザインを学び、広報写真のカメラマンなどを経て25歳で帰郷した。実家の製材所「高村木材」で専務を務める。

さすが木のまち、と言われるようにしたい



製材所経営
日田市石井町

高村 真志
〈40〉

日田に帰ってきたころは、仕事がつまらなくて「どうしたら楽ができるか」ばかり考えていました。内装材に使う板加工を始めたころ、一枚一枚の木目の違いに気づき、木の難しさや奥深さが分かってきたら仕事に面白くなりました。いつか、日田の街中のガードレールや看板を日田杉にして「さすが木のまち」と言われるようにしたいな。中高生の人々に、偉そうなことは言えないけど、一つ言いたいのは「やってみたい」と思ったことを続けていたら、案外うまくいく転がっていくよ、ということ。

日田は小さいまち。だから、すぐ手の届くところに仲間がいる。協力してくれる人がそばにいれば、新しいことも生み出していけるように思います。

SHINGO KAJIWARA

1987年生まれ。日田高卒。熊本県内の大学、同大学院へ。鳥取県の乾燥地研究センターに勤務し、砂漠などで育つ作物を研究した。26歳で実家の梨農家を継ぐため帰郷した。

市民の多様性、
懐の深さを感じます



梨農家
日田市田島

梶原 真悟
〈29〉

正月に帰省するたび、父は「農業は思い通りにいかない。収入も思うほどよくないぞ」と厳しさを口にしました。だからこそ、長男としての責任感もあって「若いうちから挑戦してみたい」と思い帰郷しました。梨生産に携わって3年がたつけど、天候に左右されるし、花粉を付けるタイミングも難しい。「一生勉強が必要だ」と痛感します。家族で相談しながら手入れしてから育て、収穫する。普通の会社では体験できないやりがいと、楽しさがあります。

日田にはいろんな分野で新しいことに挑戦している人が多く、市民の多様性、懐の深さを感じます。自分もいつか農業の仕組みを大きく転換できるような挑戦をしたい。日田のようなローカルな土地だからこそ、それができるはずですよ。

YUKO FUKUZAWA

1991年生まれ。東京育ち。東京の大学を卒業後、2014年4月に日田市上津江町の総合林業会社「トライ・ウッド」へ入社。森林保全全部で山や森林に関するデータ管理などの事務に取り組む。

山への愛がある
日田が好き



林業会社員
日田市上津江町

福沢 祐子
〈25〉

山の現場に入って仕事をする人をサポートしたいと思って、トライ・ウッドに入社しました。高3の春に進路を林業へ定め、大学では森林の機能性や生態学などを広く学びました。自分の利益だけでなく、広域的な利益を生める産業は林業以外に考えつかなかった。来てみたら、一緒にいたいと思える人が多かった。山への愛情を持って、生活の中でさりげなく大きな仕事をやっているところがカッコいい。いい意味で私を特別視しない日田の環境は心地よいです。

日田の中高生の皆さん。「あれが好き」という感覚を大事に、好きなことをして。興味があることに素直になつて、外に出てもいい。日田を大切な帰る場所にして、育つたことをお守りにすればいいんじゃないかな。

YOSHIAKI EMOTO
MISUZU

美鈴さんは1985年、日田市石井生まれ。芳昭さんは1987年、福岡県小郡市生まれ。互いに美容室へ勤めていた横浜市で出会い、2014年に結婚した。翌年7月、日田市渡里で美容室「émotion」をオープンし、2人で営む。

帰って来られる場所
つくっておきます



美容室経営
日田市渡里

柄本 芳昭
美鈴
〈31〉〈29〉

「生まれ育った日田へ恩返しをしたい、頑張つて盛り上げたい」(美鈴さん)という思いで移住を決めました。固定客ゼロからのスタートで周囲からは心配されましたが、不安はありませんでした。美容を通じてお客様を感動させ、日田を楽しい場所にした。ここに来ると楽しい、きれいになれる」の言葉が何よりうれしいですね。日田は良くも悪くも田舎ならではの、人の温かさがある一方、若者向けの場所は少ないのでは。

中高生の皆さん、日田を出てもいいので、持っている夢へ諦めず妥協せず、徹底的に向かつていつてほしい。また帰って来られるような場所を、私たちがつくっておきます。

きっと、
すべての道が、
誰かの家路。

HITA
PRIDE
PROJECT

SEIMA KAWAZU

1984年生まれ。日田高卒。福岡市のスポーツ専門学校を経て、幼稚園などへ体育講師を派遣する福岡県久留米市の会社に就職。経験を生かし2007年の帰郷後は、体育指導やアウトドアイベントを企画・運営する自営業を始める傍ら、カヌーを学んで2016年10月のW杯にも出場した。

自然の豊かさ、
温かい人とのつながり健在



HITA
PROJECT

河津 聖駒
〈32〉

スポーツインストラクター・カヌーアスリート
日田市大山町

カヌーに出会ったのは帰郷する1年前。普段は見下ろしている風景とはまったく違う川が新鮮で、その流れの中でボートを操作するおもしろさにも魅せられました。仕事の喜びは教えている人の上達。自信が出て「もつと上を」と向上心が生まれたり、前向きになったりする姿を見るのは本当にうれしいものです。帰郷後の大山は、市町村合併に伴って独自の催しも減って少し元気がないようにも見えました。でも大山川などに象徴される自然の豊かさ、温かい人と人とのつながりは健在。若い人たちは就職や進学で外に出る人もいるでしょうが、日田で自ら何かを作りだし発信していくことも可能です。大切なのは人生を切り開いていく「生きる力」を身に付けることだと思います。

YOSHINORI SASAKI
YASUKO

美徳さんは1963年生まれ。日田高卒。埼玉県の大学を卒業後、東京都内の中華料理店3軒で計約7年勤務。靖子さんは日田市豆田町出身。京都の短大卒業後、美徳さんと結婚。2人で1930年創業の飲食店「寶屋」を営む。

もう一回帰ってきたい。
そう思われる町に



HITA
PROJECT

佐々木 美徳
靖子
〈52〉〈53〉

飲食店経営
日田市元町

家業であるJR日田駅前の食堂「寶屋」を経営しています。日田のまちづくりグループ「ヤブクグリ」と協力して、日田杉の薄板で作った弁当箱に地元食材を詰めた「きこりめし」も開発しました。仕事は毎日とても大変ですが、お客さんに喜んでもらえる、直接ありがうと言ってもらえるのがやりがいです。日田が今抱えている課題は複雑だけれど、働くところがあれば若者は戻って来られるのでは。「もう一回帰って来たい」、そう思われる町になってほしいです。中高生にはいろんな経験をして、たくさんの人と出会って、失敗してもいいから多くのことに挑戦してもらいたい。諦めずに最後までやった人には、何らかの結果が付いてくると思います。

HIROKI SHIMOJI

1986年生まれ。沖縄県宮古島市出身。2005年に日田市の中津江村の農林業会社「中津江村農林支援センター」へ入社、現在は取締役を務める。毎日早朝から山に入り、樹木の伐採や搬出作業に従事する。

悪い人に出会った
ことがない



生まれ育った島の環境から出たくて、林業に進路を決めました。修学旅行で見た九州の山の風景が新鮮だったので。できるだけ静かな田舎がよくて、「村」と書かれた中津江を選んだ。実際に住むと想像以上にすごく、田舎でコンビニもないけど、仲良くなった隣のおばちゃんのご飯を持つて来てくれました。日田には気さくに話す人が多いと思います。悪い人に出会ったことがない。林業は結果が目に見える仕事で、整備された山を見ると達成感があります。まさか自分が重機を扱う仕事に就くとは思わなかったけど、覚えだしたら楽しいです。皆さんも頭で考えるより、何でもやってみた方がいいよ。やると決めたことを、本当の限界が来るまで本気で頑張ってください。

KENICHI NISHISHITA

1983年生まれ。日田高卒。1870年創業の旅館「伯亭 若の屋」を継ぐため、関西の大学へ進学。大阪市や奈良県のホテル務めを経て日田へ戻り、若の屋のマネジャーに就任。

外から見ると
豊かな町



実家を継ぐことは最初から意識していませんでした。もともと興味もあつたし、現実に進路を考えると「自分が継がなくては」と。働きだして、お客さまからダイレクトに反応が来るサービス業の魅力に気がきました。お客様と接する時間は3割、あとの7割は準備に費やします。いかに準備をするかで満足度は変わる。自分が仕込んで提供したもので喜んでもらえることがやりがいです。ね。高校生までは田舎で盆地、暑くて寒い日田が嫌なときもありましたが、外から客観的に見ると歴史文化や自然などが非常に豊かな町だと気付きました。時間と環境が許せば、一度外に出てみては。もつともつと自分を磨いて、外から日田を見れば、その素晴らしさに気付くと思います。

HITA
PROJECT

下地 弘毅
〈30〉

農林業会社役員
日田市の中津江村

HITA
PROJECT

西下 賢一
〈33〉

旅館業
日田市豆田町



HITA PRIDE PROJECT

今日が終わるなあと想う人がいる。
今夜が始まるなあと想う人がいる。

KAZUTO KAJIWARA

1970年生まれ。日田林工高卒業後、福岡の大学に進学、東京の建設会社に就職した。2004年3月に実家の食品加工業「梶原食品」を継ぐため帰郷し、代表を務める。

ここできしかできない
仕事があるよ



梶原 和人 〈46〉

食品加工業

日田市前津江町

日田から離れたくて東京の建設会社に就職したけど、父が始めた食品加工業を「手伝ってくれ」と言われふるさとに帰りました。うちで作る柚子こしうは、全国から注文が来ます。「おいしいから、またお願いします」。そう言われることが、仕事のやりがいだし、励みです。チューブ入り柚子こしうや液体柚子こしうなど、商品開発にも積極的に取り組んでいます。小さい会社だけど、いろんなことを考えながらやるのが楽しい。日田は田舎だけど、ここできしかできない、ここからできるという仕事はたくさんあると思う。自然や食べ物、ものづくりなどいろいろな仕事を生みだせる可能性にあふれた場所。そんな日田をもっともつと良くしたいな。

SHINICHIRO KAWAZU

1969年生まれ。日田林工高卒。福岡県や大分市で服飾会社勤務や飲食店経営などを経て、2002年、大山町の複合観光施設「豊後・大山ひびきの郷」のオープンに合わせて入社。現在は「ひびき事業部」部長。

将来は知識や経験を
蓄えて帰ってきて



河津 真一郎 〈48〉

観光施設勤務

日田市大山町

実家は梅や栗などを育てる農家ですが、サービスマン業に興味があつたので継ぐつもりはありませんでした。最初の仕事はスーツの販売員。お客さまとやりとりする魅力、売り上げという数字が伸びる達成感を知りました。一村一品の発祥地で友人もいる地元がもとと好きで、「ひびきの郷」ができたタイミングでちょうどいいやと戻りました。今は温泉やレストラン、宿の運営などを担当する「ひびき事業部」に勤めています。日田は自然が豊かで周りの人が温かいのが良い所だけど、医療面での不便さや働く場所の少なさは課題かな。中高生は日田を出て行くと思うけど、将来は知識や経験を蓄えて帰ってきて、もつと魅力ある場所にしてほしいですね。

TOMOKAZU MATSUMURA

1980年生まれ。日田市若宮町出身。日田林工高卒。福岡県朝倉市の木材プレカットの会社に就職。21歳の夏に帰郷し、家業のタイヤ修理販売業の傍ら夏場は鮎の建網漁も営み、三隈川で木舟を操る技術には定評がある。

身近に祇園と鮎



松村 友和 〈37〉

タイヤ修理販売業

日田市北友田

福岡県で会社勤めをしていた時期も含めて日田を離れたかったのは「日田祇園」にずっと関わっていたかったからかな。祇園も鮎漁も小さい頃からずっと身近にありました。家業を継いだのは「自分が育った場所がなくなってしまうのが嫌だった」のが理由。今では頼ってくれるお客さんの笑顔が何よりの活力になっています。日田の祇園をはじめとした文化、水郷と呼ばれる自然豊かな風土が好き。このふるさとを守り、活気づけようと、異業種の仲間たちと毎年フェスタを開いています。何でも一歩踏み出して挑戦することがその後の人生に役立つのだと思います。いろんな人と付き合つて、話して、怒られて、学んで。自分を育ててくれたふるさと、日田に何か恩返しできたらと思っています。

MASANORI YOKOO

1990年生まれ。日田林工高卒。「夏の甲子園」に出場した。高校卒業後は大分市の建設会社に4年間勤めた。2012年、家業の内装材メーカー「カネサダ横尾木工所」に入り、営業やネット販売管理などを担当。2016年秋から同社専務。

一緒に盛り上げていこう



横尾 昌紀 〈26〉

内装材メーカー専務

日田市日ノ隈町

幼い頃から家業は継ぐものと言われ続けていたので、日田に戻ることに違和感はありませんでした。外の世界を一度経験したことで人をまとめる難しさ、妥協せずにやり通す強い意志の大切さが分かり、改めて父と一緒に仕事したいと思うようになりました。業界の経営環境は厳しいですが、付加価値の高い商品を提供することで勝負していきたいと思っています。日田は人口が減り活気を失っています。企業や大学の誘致など若者離れを食い止める環境づくりも必要でしょう。若い人には、自然や歴史・文化が豊かで人と人とのつながりが深い日田の良さを理解し、私たちと一緒に盛り上げていこうという気持ちになつてもらえたらうれしいですね。